ビーバーの国から近代国家へ

カナダの歴史

カナダにいつから人が住んでいたかは明らかでない。ただ、現在のユーコン準州の北部には、二万五千ないし三万年前に人が住んでいた形跡があり、北アメリカではこれが最も古い。これらの古代人は、アジア大陸からシベリアへ達し、当時アジアと北アメリカを結んでいた大平野を横切り、アラスカの内部を通って、カナダのほとんどをおおっていた最後の氷河期に、地肌を見せていたユーコン一帯へ向かったと思われる。彼らは氷河の間をぬってさらに南下したかも知れないが、押し寄せる氷河によってそのあとかたはかき消されてしまった。しかし、氷が解けだすと、クロービスと集合的に呼ばれるこのアジア系集団は、マンモスや馬、野牛、となかいなどを追って、北アメリカ全域へと急速に広がっていった。クロービス文化は、大陸東部でプラノと総称されるいくつかの地域文化に分かれ、西部でアーケイックと呼ばれるいくつかの文化に派生していった。これが、カナダの、いわば先史時代である。

ヨーロッパ人がカナダにやってきたのは、それから何千年もあとである。北欧伝説によると、九世紀にバイキングが今のアイスランドとグリーンランドを植民地化し、さらに南と西へ探検の足をのばした。その後、九八六年頃になって、「赤ら顔のエリック」と呼ばれる男がグリーンランドに基地をつくり、その息子「強運のレイフ」が一〇二〇年頃、ニューファウンドランドの北端に植民地を建設したといわれる。コロンブスが西インド諸島を発見する五百年も前のことである。

バイキングだけでなく、彼らに続いてそのほかのヨーロッパ人や漁夫がカナダに達したことは容易に推測されるが、確かな記録はない。ジャック・カルチェーは、一五三四年の処女航海の際、ニューファウンドランドとラブラドールの間にあるベル・アイル海峡の沿岸で、フランスのラ・ロッシェルからやってきた船を発見、帰りのコースにつかせたことがある。ジョン・カボットがイギリス国王の命をうけて上陸したのはニューファウンドだったのか、あるいはノバ・スコシアだったのか、はっきりしない。ただ、カルチェーの航海と同様、カボットの目的も金銀珠玉の地を発見することにあったことは明白である。しかし、カボットが発見したのは、当時のイギリスやフランスの漁民の間ではすでに知られていたグランド・バンクスの豊富な魚群だけで、それ以外に見るべきものはなかった。カルチェーは、インディアンと、セント・ローレンス河流域と〝カナダ・ダイヤモンド〟（あとで石英とわかった）を発見した。

カナダの近代史は、こういわば新大陸の富を求めて始まったわけである。この富の追求というのは、カナダの近代史を特徴づけるもので、スペインやポルトガルの探検家や、カボット、カルチェー、あるいはカナダに「ニュー・フランス」を建設し、カナダ建国の父と呼ばれるサミエル・ド・シャンプランにしても、新天陸の富が探検、開拓の強力な動機となっていたことは間違いない。その意味で、ビーバーの毛皮が果たした役割は大きい。ビーバーの毛皮は柔かくて、十七世紀のフランスにおけるフェルト加工に適していて、ビーバー帽は当時のヨーロッパで大流行。そのため、フランスの毛皮交易人や狩猟家は、新大陸の奥深く――ハドソン湾、ミシシッピー川、カナダ大平原――へと進み、十九世紀初めには、サイモン・フレイザーがついに太平洋側のブリテッシュ・コロンビアに毛皮交易所を建てるに至るのである。毛皮交易は、カナダ開発の原動力であった、といえよう。

サミエル・ド・シャンプラン

この毛皮交易に興味を示したのは、もちろんフランス人ばかりではなかった。現在のニューヨーク周辺に植民していたオランダ人や、一六六四年に同植民地がイギリスの手に渡ってからは、イギリス人がフランス人と毛皮交易でしのぎをけずった。イギリスが「ハドソン湾会社」を創立して、積極的に毛皮交易（および新大陸開発）に乗出したのは一六七〇年のことである。

カルチェーの探検によってセント・ローレンス河一帯を発見し、シャンプランによって現在のケベック州に植民地を建設したフランスからは、その後も移住者が相次いで、植民地の数も増え（大西洋沿岸、ケベック、トロア・リビエール、モントリオールなど）、フランスは北はハドソン湾から南はニューオーリンズまで、東はニューファウンドランドから西はウィニペッグ湖まで制する大勢力に発展した。一方、すでにアメリカに十三植民地を確立し、立派な政治・社会を築いていたイギリスは、ハドソン湾会社を通じてカナダの北部や西岸一帯を支配しており、両者は激しく抗争していた。しかし、結局、一七五九年にケベック市が、翌年モントリオールが落ちた。「七年戦争」（植民地争奪戦）で敗北したフランスは、一七六三年のパリ講和条約によって「ニュー・フランス」を手離すことになる。そしてイギリスは、カナダの支配権を完全に掌握したわけである。

こうして支配権の問題は片付いたものの、もともと言語や習慣を異にする約六万のフランス系の人々が英国領北アメリカに残ることになった。英国は一七七四年に「ケベック法」を定め、フランス系カナダ人のこれまでの諸制度や言語、宗教、文化を継続させるなど、理解ある態度でのぞんだ。しかし、ケベック州に英国系アメリカ人やスコットランド人などがやってきて毛皮交易を手に入れたり、アメリカ独立戦争（一七七五―一七八三）の突発で農民や母国イギリスに忠誠な「王党派」（あるいは忠誠派）の人たちがカナダに流入してきたりしたため、フランス系住民とイギリス系住民との間にいろ